

## 「岐阜らしさ」と都市景観 富樫幸一（岐阜大学地域科学部）

成長志向から成熟社会への移行のなかで、街並みへの関心が大きく変わろうとしている。バブル崩壊後、地価の下落と都心指向からマンション建設が進んでいるが、古い街並みでは景観を破壊するものとして反対されている。岐阜市でも長良橋南の湊町や伊奈波界限でマンション問題が起こり、住民によるまちづくり活動が生まれた（第71号参照）。

日本の都市計画法制度は画一的かつルーズで、2階建ての伝統的な木造建築物が並ぶかつては栄えた古い街並みも、駅前や都心商店街も同じ商業地域になっているため、高層マンションの建築が許されてしまう。しかし今年（2003年）始めの国立マンション訴訟（東京地裁）は、住民が70年間、街路樹と低層住宅が並ぶ大学通りを守ってきたことの意義を認めて、私的利益の追求のために立てられたマンションの高層部の撤去を求める画期的な判決を下した。現地を見てきたが、マンションが似合わないだけでなく、この東京郊外の瀟洒で人びとのにぎわいに溢れた街の良さも印象的であった。

岐阜県内では世界遺産に登録された白川郷はもちろん、高山市や美濃市、岩村町が伝統的建造物群保存地区の指定を受けているし、その他にも古川町や郡上八幡町のように個性的な街並みを持ったところが多い。また、中心市街地の活性化のために街並みづくりに取り組んでいる大垣市や多治見市もある。

行政もこうした住民の活動の盛り上がりを受けて、昨年（2002年）10月、県としては初めての「都市景観シンポジウム」を開催して、上記のような県内各地区からの報告や参加を得た。ぎふまちづくりセンターでも一昨年（2001年）11月の岐阜市の「都市景観フォーラム」以来、都市景観サロンを毎月続け、岐阜市の川原町や伊奈波界限のまちづくり活動のお手伝いをし、また大学としても駅南の加納の城跡・中山道の調査をしている。

こうした場でも「景観とは何か」という疑問が出ることもある。地理学では物的な自然景観や都市景観をまずは指してきたが、この言葉の元となったドイツ語の'Landschaft'は「土地」や「その地域らしさ」という広い意味を持っている。中世の自治都市の伝統を守り、領邦国家以来の地方分権（連邦制）と地域性を保持してきた国らしい言葉である。ドイツの美しい街並みを見て感動した人も多いただろうが、それは日本とは違って詳細な地区計画と建築規制、住民参加によって保たれているのである。

高山や郡上八幡が今、県外からの来訪者を魅了しているのは、保存され、また修景された街並みがあり、住民の街への誇りと開かれたもてなしの心が伝わるからだろう。岐阜を全国にもっと知ってもらうためにも、伝統的景観を資産として生かして行きたい。